



蓮通信

〒171-0052 東京都豊島区南長崎3-9-23
事務局 ラボン・ファミユ 207 三浦功大方
電話・FAX 03-3951-5630

URL <http://www.lotusjp.com>
E-mail tokyo@lotusjp.com

2009年2月13日発行 通巻76号

如月半ばお変わりありませんか。昨年は会活動にご協力をいただき感謝致します。本年も、どうぞよろしくお願ひします。会員各位のご健勝を祈念し、蓮通信43号をお届けします。

第11回定時総会開催

蓮文化研究会第11回総会は、豊島区立勤労福祉会館で、1月24日(土)午後1時30分より、30名の出席と、65名の委任状をいただき開会。提出議案が承認されました。4時50分終了。

議事進行と昨年の報告および今年の事業予定は、左記のとおりです。(同封別紙を参照下さい)

- 開会
- 議長選出 伊藤俊久氏
- 会長挨拶 南定雄会長
- 議事進行 2008年事業報告
- 2008年会計報告・会計監査報告
- 新理事紹介
- 2009年事業計画提出
- 2009年予算案提出。その他。
- 閉会 会員の自己紹介

講演会 北澤光太君/池上正治理事
懇親会 池袋駅近くの居酒屋に場所を移し、25名の参加で、情報交換と蓮縁の絆を深める酒宴となりました。光太君御一家も同席していただき、蓮の話で盛り上がりました。

絶賛！光太くん11歳「蓮の世界」講演

今年の蓮文化研究会の総会・講演は2題、ある人にいわせれば、孫と爺さんの蓮コラボレーションとか。確かに、演題「蓮の世界」の小学5年生の北澤光太くん、還暦をすぎて2歳、「埃及(エジプト)ロータスを観る」の池上理事では、年齢が約6倍ちがいます。

そして注目の的は、やはり光太くんでした。千葉市瑞穂小学校に通う光太くんは、この2年間、東大の緑地植物実験所が主催する勉強会に参加自宅のベランダで蓮を育てて、よく蓮を勉強し

てきました。光太くんの研究ノート「蓮の世界」は、昨年末、千葉市の小中学特別支援学校児童生徒作品総合展覧会で「科学部門」に選ばれました。たいへん栄誉なことです。

その研究ノートの内容を、スライドショーで(お父さんが)放映し、Q&Aをふくめ約1時間、光太くんはマイクを手に熱演してくれました(写真)。ときにシェーとか言いながらも、ほとんど緊張することなく、堂々たるものでした(緊張していたのは、パソコン担当のお父さんと、ビデオ担当のお母さん?)。

会場からは、その小学生ばなれしたレベルに、ため息がもれていました。これらの講演内容については、次号の会誌『蓮文化だより』(14号、来年発行)でやや詳しく報告します。



埃及(エジプト)ロータスを観る 池上正治

講師の北澤君と池上理事の講演を聞き、12名の会員以外の方の参加をいただき、50名定員の会場は一パイでした。池上理事は、日本が中心の世界地図とヨーロッパ中心の世界地図(日本は東の端に)、オーストラリア中心の世界地図(日本は逆さまになっている)会場を盛り上げ、ギリシャ神話に出てくるロータス、アルフレッド・テニスの『The Lotus Eater』の紹介と、サマセット・モームの短編小説『The Lotus Eater』の載っている『サマセット・モーム全集』(第30巻 新潮社)の訳に、蓮はできませんが、第23巻の「支那学の徒」の中に、一箇所「蓮」を発見の説明があり、いよ

いよ待望のエジプトのロータスにうつりました。ピラミッドの内部、神殿の柱、神殿に刻まれたロータスの写真を投影しての説明でした。エジプトには、ピラミッドや神殿はもとより、生活の中にたくさんロータス文様が溢れていました。しかし、最後の一枚の写真でエジプト・ロータスの正体が判明しました。国立考古学博物館の入口には、パピルスが生え、ロータスが咲いていましたが、ロータスは睡蓮でした。エジプト・ロータスは、蓮(Lotus Nelumbo科)ではなく、睡蓮(waterily Nymphaea科)なのでした。

第11回定時総会報告・別紙について

- 二〇〇八年事業報告、会計報告、第六期理事就任、二〇〇九年の事業計画、予算案は別紙の通りです。
- 二〇〇九年の事業予定

- 1月24日 第11回総会 蓮文化だより発行
- 2月初旬 蓮通信43号、蓮文化だより13号発送
- 4月11日(土) 第43回例会「蓮根植替え実習及び蓮根分根」東京大学緑地植物実験所
- 6月20日(土) 第32回例会・情報交換会
- 6月中旬 蓮通信44号発行
- 6月下旬日 第23回中国荷花展参加
- 7月中旬(土) 第45回例会観蓮会 場所未定
- 9月中旬 蓮通信45号発行
- 9月30日 『会報蓮文化だより』14号原稿締切り
- 10月中旬 第46回例会・情報交換会
- 11月下旬 蓮通信46号発行

『蓮文化だより13号』発行

『蓮文化だより13号』をお届けします。今号には19名の会員より原稿をいただきました。特集はフランスの蓮祭りとフランスで最初に咲いた蓮の花を、雅子ヴァイラー会員が調査をした記録です。会員各位には例年どおり、二部お送りいたします。一部は手元に、一部は蓮文化向上のために、蓮に興味ある方にお知らせいただき、会員を増やしていただければ願っています。ご意見、ご感想などお寄せいただければ幸いです。余分にご希望の方は、一部五百円(送料別)にて頒布します。ご希望の方は事務局まで。

蓮根植替え実習及び蓮根分根のお知らせ

日時 2009年4月11日(土) 午前10時～14時
 場所 東京大学緑地植物実験所
 住所 千葉市花見川区畑町105-1
 問合せ 事務局当日の電話 090-3596-2822 (三浦)
 講師 南 定雄 会長
 参加費 会員 ¥2000 (肥料代及び蓮根代)
 非会員 ¥3000 (肥料代及び蓮根代)
 集合場所 ① 東京大学緑地植物実験所
 ② JR総武線新検見川駅改札口

9時30～10時に新検見川駅に着いた方は送迎いたします。

宿泊 宿泊ご希望の方は、会場近くにある東大セミナー・ハウスをご用意いたします。

宿泊代 5000円(予定)

備考 詳細は宿泊希望者に後日ご連絡いたします。

昼食は各自でご用意下さい。近くにコンビニがあります。お茶のご用意はいたします。

締切り 準備の都合があります。参加希望の方は4月5日までに事務局までご連絡下さい。

展示参加者募集

毎年8月初旬、高橋里枝子会員が運営の「ギャラリイROMまえばし」で、開催しています「花蓮展」は今年で第4回を迎えます。蓮の花をテーマに制作をされている方で、三人展ですが工芸・絵画・陶器・書・写真などジャンルは問いません、展示をご希望の方は、ご連絡下さい。昨年迄の記事は『蓮文化だより』の41頁に掲載していますので、ご参照下さい。

問合せ先 木暮照子理事 048-556-6657

CD「大賀ハスによせて」がカラオケに入る

奈良県在住の村上恒子会員のご主人が作詩・作曲したCD(MMCD・0001)「大賀ハスによせて・日高川旅情」賀川けい子歌が、昨年カラオケ(USENウガ)に入りました。リクエストして唱ってみて下さい。CD購入をご希望の方は、



村上さんへ直接ご連絡下さい。

電話 0743-53-2860

蓮の年賀状、こんなに多彩!

年賀状の中から、蓮の絵がらを、取りだしてみました。花や果托の写真、自筆の絵、独創的な組合せなど、まさに百花繚乱です。編集担当の周囲だけで、こんなにあり、実際にはもっとあることは、想像に難くありません。



蓮のQ&A (1～100まで、90を残すのみ)

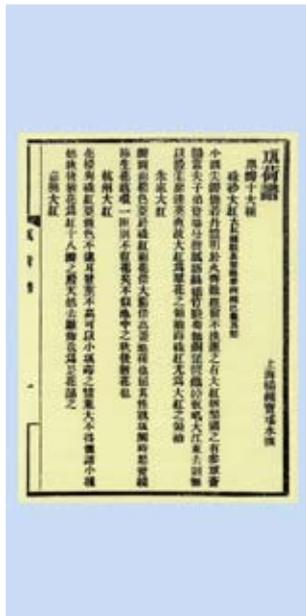
094 古代中国には蓮の専門書がある?

あります、清代(1808年)の『缸荷譜』(こうかふ)がそれです。著者の楊鐘宝は上海の人、江南(江蘇・浙江の一带)の蓮を調べて、33品種の花蓮を選びだし、それらを考察した結果の著作です。

この『缸荷譜』を、「中国初の花蓮の専門書」と高く評価しているのは、王其超ご夫妻の『中国荷花品種図誌』(蓮のQ&A 95番、参照)です。それによれば、13世紀初から19世紀初にかけて、蓮は盛んに栽培され、観蓮会もよく行なわれたそうです。そうした背景から、『缸荷譜』が誕生したのです。

まだ日本語に翻訳されていない『缸荷譜』ですが、その主要な部分は、『蓮への招待』(三浦功大著、蓮のQ&A 97番、参照)です。すでに紹介されています(第205～208頁)。それによれば蓮の花は、第1レベルの分類として花弁(単弁・重弁・千弁)、第2として花の大きさ(大・小)、第3は花の色(大紅・水紅・銀紅・捻紅・白・灑金・





錦辺、第4は花卉の形(丸い・尖る)です。

この中で、捻紅(ねんこう)は、日本でいう爪紅(つまべに)です。灑金(さいきん)とは、伝統工芸の世界で、「金箔を吹きつける」ことですが、蓮の花の場合、どういふ色や形状をさすか、不明です。これら以外はほぼ想像がつくでしょう。

以上が、楊鐘宝いうところの「芸法六条」であり、その内容は今日なお一定の参考価値をもつという点で、まさに中国初の蓮の専門書です(C)。

095

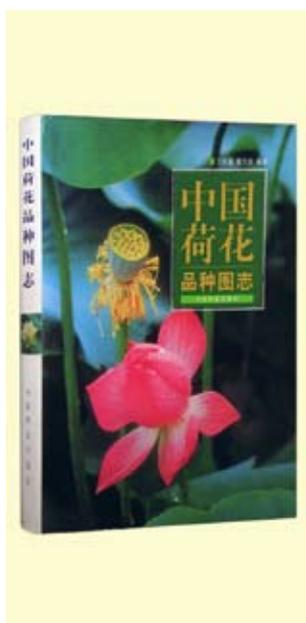
現代中国には蓮の専門書がある？

あります、『中国荷花品種図誌』(2006年、中国林業出版社)がそれです。この本の著者である王其超・張行言ご夫妻のことは、ほとんど説明不要でしょう。中国で、花蓮の展覧会や蓮観蓮のシンポが盛んであり、われらも招かれて参加、出席しています。すべて王先生ご夫妻を中心とした人たちの功績であり、そのお陰です。

2004年夏、ご夫妻は蓮文化研究会の招きにより来日、東京から京都にかけての各地で講演され、蓮の関係者と交流して、忘れがたい印象を残されました。

これまでも王先生ご夫妻には、『中国荷花品種図誌』(1989年)『中国荷花品種図誌・続誌』(1999年)などの専門書があります。今回の著作はその集大成ともいふべき内容です。その特長は、みごとに図版もさることながら、体系的であること、その独自の分類法、収録された花蓮の数の多さです。

全9章からなり、第1〜8章では、蓮の起源から分布、歴史、栽培などが論じられています。とくに7章では、中国と日本の分類を比較し、中国では最終的に二元分類とな



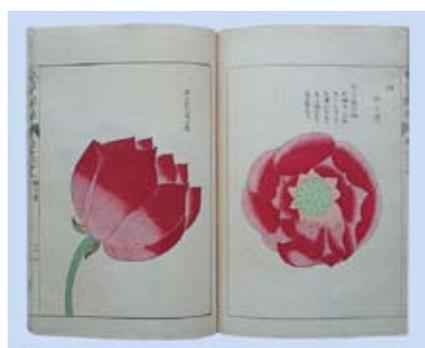
り、3系・6群・16類・48型となった、とあります。

第9章(各論)は、全体の3分の2強をしめる頁数ですが、品種ごとに起源やサイズ、花の数や時期などを詳述しています。ちなみに総数は608品種であり、巻末の索引は中国語とローマ字が併記されており、じつに便利です(M)。

096

日本古代に蓮の専門書は？

日本古代・中世・近世・近代を通して蓮だけをとりあげた専門書と呼べるものはありません。中国から本草関係の書物が伝えられていましたが、1596年52巻に及ぶ李時珍の「本草綱目」が1607年には日本にもたらされました。1639年刊行された徐光啓の「農政全書」にでている「蓮」も元禄7年(1694年)貝原益軒の「花譜」・1704年の「菜譜」に記述引用されています。農書として有名な、「農業全書」は、1697年(元禄10年)、宮崎安貞によって書かれましたが、「農政全書」「本草綱目」の影響を強く受けています。



その後、島津重豪が

曾繁・白尾国柱らに命じて、和漢の資料で考証させた「成形図説」

(1804年〜1805年)へと続き、佐藤信淵の「草木六部耕種法」(天保3年・1832年)の蓮へと続きます。信淵に

対する評価はいろいろありますが、明治初期、勸農局が農業に必要な

書物をまとめた「農書要覧」という本には、「成形図説」と共に、「草木六部耕種法」も載せられています。六部というのは、作物を根・幹・皮・葉・花・実のどの部分を目的にする作物かで分け、土質、肥料、播種など解説しています。蓮は蓮根用の需根部と需花の双方に出ています。種の雌雄などの、理解し難い記述もありますが、肥料に、有機質肥料のほかに、石灰、硫黄、鉍山残滓などの無機質肥料の記述があります。また東金で池を作った時に出た昔の蓮実を処理して播いて発芽したとの注記があります(K)。

097

現代日本には蓮の専門書がある？

蓮事典と称せるほどの学術研究書は、残念ながらもまだ皆無です。

蓮は文化的には仏教経典を抜きに出来ませんが、これを除く、それに準ずる唯一の専門書を上げれば、『蓮への招待』三浦功大著(2004年、西田書店)があります。この本はA5版487頁(本文)・十索引(37頁)であり、最大の特徴は蓮を理解するために欠かせない、重要な文献を数多く紹介していることでしょう。

その内容は、蓮に関する植物学資料に始まり、考古学、蓮の歴史、品種と図譜、観賞蓮栽培史、蓮名所、蓮に関する行事、蓮文様と美術など、花蓮に関する重要な面を中心に、分かりやすく総合的に記述されています。また、花蓮の品種、歴史的な文化資料や美術品などが最も多い中国、日本の蓮に的がしぼられており、蓮の生育形態、文化に係わってきた蓮について資料写真、図版等を的確に揃えて纏めています。ことに花卉だけの妙蓮、江戸期の蓮を愛でた大名の観蓮等の豊富な資料は圧巻です。



東洋種、アメリカ種の大別の記述、遺伝学上や蓮の香りに関する研究など最新の論文も掲載されており、今後の学術研究へのステップ資料として一定の役割を果たすものと思われます。中国、日本だけをみても蓮の資料は膨大ですが、一般の人が理解しやすい課題を中心に分かりやすく解説しており、蓮を詳しく理解出来る便利なハンドブックと言えます。(T)。

098

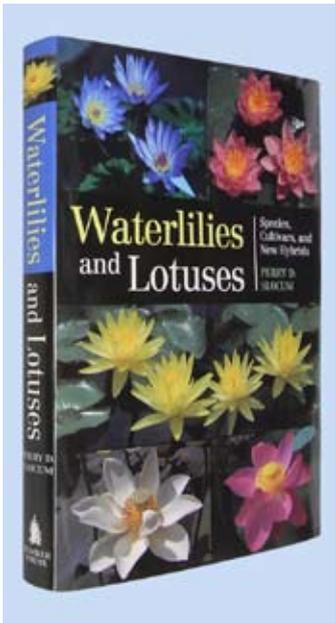
アメリカにも蓮の専門書がある？

あります、2冊。『WATER GARDENING Water Lilies and Lotus』(水辺の園芸睡蓮と蓮／1969年)と『Waterlilies and Lotus』(睡蓮と蓮／2005年。写真、左)です。

前者は、P・D・スローカム、P・ロビンソン、F・ペリーの共著で、309頁。主な内容は、熱帯および温帯の睡蓮、それと蓮について、原種と園芸品種、その交配や文化の歴史です。残念ながら、蓮が主役ではなく、記述は11頁だけです。

後者は、P・D・スローカムの独著で、260頁。その内容は、主に前者の睡蓮に関する部分を抜粋し、さらに最新の情報を加え、蓮については14頁です。2種2変種の蓮を取りあげ、記述のポイントが園芸品種にあることは、前者と同じです。

かのミセス・スローカムは、日本でも人気のある品種です。それに関して、「キバナハスとロセア・プレナとよばれる紅八重の園芸品種を交配して、(P・D・スローカムにより)1964年に作出された」との記述は興味づかいです。2冊の蓮の本を書いた人が作りだし、夫人に捧げた花こそが、ミセス・スローカムなのです。ここでいうロセア・プレナは、日本や中国によくあるピンク系かと思われる



るのですが、原書からは、それを特定することができません。また、アメリカ大陸に特有のキバナハス *lutea* があるわけですが、2冊の原著では、園芸品種 *Yellow Bird* の記述があるだけです。日本や中国と異なり、原産国では、キバナハスはあまり注目されていないのでしょうか(Y)。

099

インドには蓮の専門書がある？

あります、V・K Malhotra 博士の *Lotus* (蓮) がそれです。英語で書かれています。じつはその原本があり、それはヒンディー語で書かれました。原本は1994年、英語本は1999年に、それぞれ出版されています。

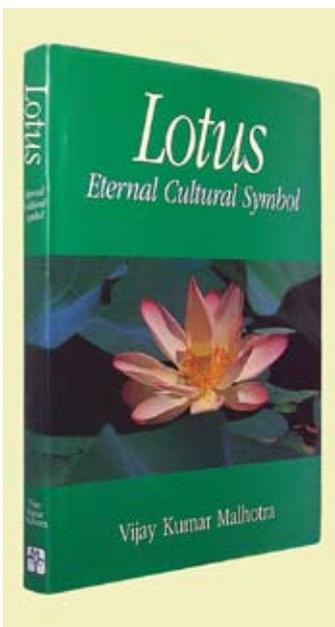
そのサブタイトルにある「永遠の、文化的、シンボル」がこの本の内容をよく示しています。目次を見れば、それはさらに明らかです。例えば、

- 6章 文化シンボルとしての蓮
- 7章 ヒンズー教の伝統にみる蓮
- 8章 仏教の伝統にみる蓮
- 9章 ジャイナ教の伝統にみる蓮
- 10章 シーク教の伝統にみる蓮
- 13章 イスラム建築にみる蓮

さらに興味づかひなのが、最後の2つの章です。

- 14章 芸術・建築・図像にみる蓮
- 15章 文学にみる蓮

ちなみに、この本 *Lotus* は、畏友で、インド人のKさんが、インド中を探し回って見つけたし、買ってきてくれた本です。古典の引用はサンスクリット語ないしヒンディー語の部分もあり難解ですが、いつか日本語で読める日のくることを夢んでいます(G)。



100

蓮の雑誌はあるか？

あります。昭和11年(1936)不忍池畔で明治初期以来、途絶えていた観蓮会が行われました。発起人は牧野富太郎、大賀一郎、三宅驥一らの植物学者で、当日は約70人が参加しています。以後、不忍池では毎年観蓮会が行われるようになりました。この観蓮会の発起人が中心となって「蓮の会」が創立され、昭和13年(1938)に雑誌「蓮」(A5版 48頁)が発行されました。昭和16年の4号まで続きますが、戦争で中断し、5号が出たのは、昭和35年(1960)でした。以後は発行されていません。

中国の辛亥革命(1911年)の時、孫文を援助した実業家・田中隆に、大正7年(1918)その時のお札にと、孫文から4粒の蓮の実が贈られました。その蓮の実を大賀一郎が、1961年に開花させて「孫文蓮」と命名しました。孫文蓮の開花を記念し、財界人が中心となって、1961年「蓮の実会」が結成され、同年、会誌「蓮の実」(B6版18頁)が刊行されました。以後、8号(1962年)まで発行されています。蓮の花が夏の花として再認識されはじめた頃の、1996年夏に、『蓮の話』(A5版122頁)が発行されました。編集後記には「ささやかな小冊子をだします。発行意図はきわめて明瞭。蓮についての思いを自由に書いていただく。そして夏の早朝馥郁と香気を漂わせて開く、夏の大宗の花をもっと、皆さんに観賞、育成していただきたいからです」とあります。1999年までに4号が発行されています。他に「蓮」を特集した主な雑誌は、『上方趣味 巨椋池の巻』(昭和7年11月号 上方趣味社)で、昭和8年から開墾されて消滅する巨椋池を特集しています。



『武蔵野 特集蓮』(昭和11年8月号 武蔵野会)、『多摩史談 特集蓮』(昭和22年12月号)、『植物と自然 特集蓮』(昭和43年12号 ニュー・サイエンス社)。近年、花を特集した5、6冊の雑誌が発行されていますが、「蓮と睡蓮」の特集になっていますので割愛しました(Z)。